

序

私は部屋の柱にかけられた日めくりを習慣通り、眠りに就く前に一枚はぎ取った。

——大正十六年九月二十二日——

関東地方を襲った、あの大地震からようやく一年が過ぎ去ろうとしていた。

その大きな字で印刷された日付を見たまま、しばし私は手を止める。

帝都に親類もなく、また知人もいない私にとって、あの震災はついこの前までは、関りの少ない、どこか彼の地の出来事であるようにしか感じられないものだった。

私はあの震災で書生時代の恩師を一人失っていた。

しかしその恩師と私との間にはついで、教授とその一書生と言う関係以上のものはなく、一ヶ月程前まで勤務していた京都のとある大学で、首都で開催された学会に出席していたその恩師が不幸にみまわれたという知らせを聞いた時でさえ、悲しみと呼ぶべき感情は浮んではこなかったものだった。

つまり十日程前までは震災も、そしてその震災によって亡くなった恩師も、私にとっては二十有余年間の人生の内の、比較的関りの乏しい一つの出来事でしかなかったのだ。

十日程前の昼。私が浪々の身をもてあましながら実家の濡れ縁に座り、庭をただぼんやりと見詰めていたとき、母が一通の手紙を差し出した。

和紙を厚く加工したその封筒の裏には、いかにも教養のある女性が記したであろうと思われる草書で、神戸の住所と宗方彰子と言う名前が認めてあった。

私は、その名前を見た時には、まるでその名前に心当りはなく、封筒の表に書かれた宛名が、自分のものである事を見返したほどであった。

しかしその封筒の中に収められていた便箋の、同じ書体で書かれた文面を読み進むにつれ、それが震災で亡くなった恩師の未亡人からのものである事に気付いた。

文面はまず、私のそんな感情をおもんばかってか、自分の自己紹介から丁寧な挨拶へとつづいていた。

その手紙を読み終えたとき、私は驚きを禁じえなかった。彰子からの文面は、私に神戸の大学での職を紹介したものであり、しかも神戸での住居が見つかるまでの間、自分の家での下宿さえ進めていたのだ。

私の一つ目の驚きは、何故彼女が私の辞職を知ったのか、と言う事だった。悪い知らせは千里を走り、学問の世界は狭いものであるが、そこから外部へと出することは少ないのだ。つまり彼女は、まだ生前に夫が教鞭を取っていた神戸の大学との繋がりを保持しているのだろうか。

二つ目の驚きは、彰子が私の辞職を知っているならば当然、その理由さえも知っているはずだという事だった。

私の辞職の理由は、決して自慢できるものではなかった。盛り場のカフェに務める女との醜聞。そしてその結果として私の子を墮胎しようと、いかがわしい医者の手にかかり死んだ女。その後の、女の兄と称する質の悪い男とのいざこざ。

書生時代からまださほど間のない若造の教授が引き起こしたその醜聞は、学内の事実上の支配者である老教授達にとつては、私を大学から追い出すには、充分すぎる理由だったのだ。

私は彰子からの手紙を二度読み返し、そして反射的に承諾の手紙を書きはじめた。

半ば大学での教鞭の機会はないだろうと覚悟していた私にとっては、そんな疑問など取るに足らないものだったのだ。

私はその承諾の文面を認めた手紙を投函してから、両親にその意志を伝えた。

私が起こした女給との醜聞を世間に恥じていた両親は、その元凶たる私がこの京都の町を出ることに對する喜びを押し殺し、賛成した。

そして明日が神戸に向かって出立する日であった。

ひめくりの前に立ちつづける私に、就寝を促すかのように柱時計が音を鳴らした。



翌日は雨であった。

私は雨傘だけという軽装で家を出る。身の回りの品は既に数日前に、私より一步早く神戸の恩師の未亡人宅に届いているはずだった。

私の乗り込んだ汽車の車窓の濡れた硝子を通して、見送りに出してくれた母が改札口に踵を返すのが見える。

私は動きだした汽車の振動に身を任せながら、誰もいない前の席に視線を向ける。顔の横では、窓硝子を濡らす雨滴が奇妙に外の景色を歪めるが、私に車窓から見るべきものは、既に無い。

吸い付けた煙草の煙が、流れの少ない車内にたなびき、わだかまる。

私はその煙に今の自分を重ね合わせ、そして車窓を僅かに開く、まるで煙は逃出すかのように身を踊らせて、車外に吸い出された。

私は車窓を閉じる。素早く。

一

大阪で乗換えの際に買求めた駅弁を食べた時、雨が上がり、神戸の駅に私が降り立った時には、雲の切れ間から太陽の光が射す程に天候は回復していた。

駅を出る際、私は一瞬の迷いの後、持参した雨傘をごみ箱に投げ入れる。そんな私の行動を見ていた駅員が奇妙な表情を浮べて切符を受け取り、私は駅を出る。

神戸は坂の多い町である。

雨後の清々しい空気の中を、彰子の手紙に同封されていた手書きの地図を頼りに、私は歩く。

彰子の家は、駅から歩いて三十分程の所にある閑静な屋敷街の一角にあった。その道程の殆どが登りの坂道であった事と、日頃の不精が祟ったのか、私は彰子の家にたどり着いた時には軽く息を切らしていた。

そんな私の目に写った彰子の家は、その回りにたっぷりと余裕を持って立並ぶ邸宅と比べても、まったく遜色のない程に堂々とした構えを持った洋館であった。

門の前に立ち、ふと見上げると、凝った鉄細工を施した門柱に掛けられた表札には、まだ無き恩師の名前が刻まれていた。

私は息を整える為はその場に佇んだまま、雨後の雲の切れ目から射す太陽の光に浮び上がる洋館を見詰める。

そして私は、初めて見る恩師の住いであったこの邸宅が、いかに記憶に残る恩師の印象と一致しているかと言う事に、軽い可笑しさを覚える。

私の記憶に残る恩師は、厳格な風貌とその風貌を裏切らない性格の持主であった。古くからつづく名家に生れ、その誇りと優越感にあふれ、受けた高度な教育がもたらした以上に卓越した知識を常に身にまとうていた人物。そして時折、自分程に知識を求めようとはしない書生達に向ける鋭く冷たい視線。それが私の、恩師の印象であった。

洋館を見続ける私の足元に何か触れた。

視線を下に向けると、そこには二つの鋭い目が私を見返していた。一瞬の驚きの後、私はその目が足元に擦寄ってきた一匹の黒猫のものである事に気付く。

その黒猫は、まったく私を恐れる様子も無く、漆黒のビロードのような毛皮をすり寄せ、銀色

の目をまつすぐ私に向け続けている。

私は元来、猫は嫌いでは無い。しかしその猫には、何処か私の心に冷たいものを感じさせる所があった。多分、先程私の心を過った生前の恩師の印象が、黒猫と言う、ある意味では死を連想させる動物に投影されたためだろう。いや、それとも猫の、その鋭い視線の所為だろうか……。

私があるまま動かずにいると、黒猫は猫独特のしなやかな身のこなしと、無関心さで去った。その時私は、その猫が去る際に振り返り、そして淫らとも言えるような笑いを、私に向けたと感じたのは勿論、錯覚であった。

私の目の前の門が僅かに音を立て、人が一人だけ通れる程に開く。

そこから出て来たのは歳の頃、十七、八歳ほどの娘だった。メイドがよく着るような紺色と白の洋服を身に着けている。

娘は一瞬、辺りを見回してから私に気づき、歩み寄る。

「すみませんが、エンプーサを見ませんでしたか？」

娘は私を見上げながら、真剣な瞳を私に向けた。

「エンプーサ？」

戸惑った表情で問返す私に、娘は恥ずかしげに顔を赤らめた。

「すみません、私、慌ててしまって、猫の事です、黒猫で……」

娘は視線を私から外し、言葉の最後は小声となり消え去った。私はそんな娘を微笑みを浮かべて見詰める。

「ああ、猫なら今、私の足元をすり抜けて行つたよ、向こうにね」

娘は私の指差す方向に目を向け、無駄とは知りつつもその辺りに視線をさ迷わす。

私はそんな娘の横顔を眺める。大きく開いた二重のまぶたに縁取られた瞳と、紅を知らぬ桜色の唇が私の視線を捉える。娘は「可愛い」と表現される時代から「美しい」と表現される時代への境目にある、どこか不安定さを感じさせ、男の心の奥底に潜むある種の欲望を掻き立てる雰囲気その身にまといつていた。

娘が私の視線に気づき、瞳を向け、そして逸らす。首の辺りで切りそろえられた髪がその勢いで揺れ、頬が僅かに色づく。

私はそんな娘の様子に再び微笑みを浮かべ、話し掛ける。

「ところで、ここは宗方宅でしょうか？」

私その質問に娘は驚きに目を見開く。私はその娘の反応が大袈裟すぎるのに戸惑いを覚える。

娘が再度私から視線を外し、答える。

「はい……そうですが、じゃ……貴方様が……亡くなられた旦那様の？」

「そうです、彰子様からお聞きになっているようですね」

娘は外していた視線を再び私に向ける。その視線はどこか、追詰められた小動物を私に連想させるものであった。

娘と私は瞬時、お互いの瞳を見詰め合う。

やはり先に逸らしたのは娘であった。

「はい、お聞きしております。今朝方よりお待ちしております」——「どうぞこちらへ、ご案内致しますわ」

娘のその言葉は、どこか芝居の台詞じみた雰囲気があり、先程までの関心事であった猫のエンプーサの事など忘れてしまったかのように、私の前に立ち、邸宅へと続く門をくぐる。

玄関までの、よく整備された庭の中央を通る、石畳の小道を私とともに歩きながら、娘は終始、無言であった。

白い清潔なブラウスから覗く襟足につづく、細い肩が心持ち緊張に強ばっているのを私は見て取る。

私は娘に話掛ける。

「猫の事だけ……」

その私の何気ない言葉に娘は立ち止まり、振り返る。

「エンプーサが……何か？」

娘の私に向けた視線が、今度ははっきりと脅えの感情を含んでいる事に気付く。私はその娘の感情に戸惑い、そして曖昧な微笑を浮べる。

「いや、猫に付けるにしたら変った名前だと思ってね……」

娘は私から目を逸らし、足元に視線を落とす。

「旦那様がお付けになった名前ですので……」

「そうですか……」

私と娘の会話はそれで途切れた。

私は娘に連れられて屋敷の玄関に入り、応接間に通される。

一礼し、私を残して娘は応接間を出る。私は礼儀に則り立ったままで、壁に掛けられた絵画や、マホガニーのテーブルの上に飾られた様々な装飾品に目を向ける。

絵の中の一枚の肖像画は恩師を描いたものであった。それを描いた画家は、厳格さの中に漂う心が冷えるような恩師の尊大さを見事にキャンパスに定着させていた。サインに目をやると、やはりそれは有名な西洋の画家の作品であった。

「ようこそいらっしゃいました」

その声は私の背後から突然に聞えた。振り返った私はそこに一人の女の姿を見る。

その女は黒っぽい洋装を身にまとった、まだ三十歳にかかったばかりの、美しい女であった。

その女は、振り返った私の視線をまっすぐに受け止め、そして無意識にアップに整えられた髪の毛に手をやる。

「どうぞおかけになつて下さい」

女はソファを私に示し、私が座った後にテーブルを挟んだ正面に座る。

「いやですわ、私の顔に何か付いてしまして……」

その女の言葉に私は、彼女の顔に如何に長く視線を向けていたかと言う事に気付く。決りの悪さを覚え、それをごまかすように彼女に話す。

「いえ、貴方があまりにお若く見えますので……宗方婦人ですよね？」

女は生まれながらに身に付けた上品さで手を口元に当て、薄く笑った。

「そうですね、彰子ですわ、私」

「不躰ですが、私はもつとお歳を召された方を想像しておりましたもので」

「私は宗方の二度目の妻ですよ、いえ、でしたの……、結婚致したのは私が二十、宗方が四十の頃でしたわ……」

女——彰子——の表情がわずかに曇る。

「失礼しました、ご主人の事を思い出させてしまいまして……」

「いえ、お気になさらないで下さい」

応接間のドアが軽くノックされ、先程の娘がティセットを乗せた盆を持って入ってくる。娘

は繊細な作りのソーサとティカップを私と彰子の前に置き、豊潤な香りの紅茶を注いだ。

彰子が私に問いかける。

「お茶でよろしかったかしら？」

「はい、近ごろ流行のカフェよりも私はこちらの方が……」

「そう、良かったわ」

微笑み、そして紅茶注ぎ終った娘を私に示す。

「そうそう、紹介しておきますわ、この娘が私の身の回りの面倒を見てくれます雅美です。

もう門の前でお合いになったらしいですわね」

浮かべた微笑みが深まる。

娘——雅美——が私に頭を下げた。

「三輪雅美と申します。よろしくお願いたします」

私はソファから雅美を見上げ、彼女が美しい娘であることを再確認する。視線が無意識の内に引き付けられ、何故か私の子を宿し、そしてその子を墮胎した為に死んだカフェの女の姿が脳裏

に浮ぶ。

私は軽く頭を下げる。

「こちらこそ、よろしく」

彰子が話をつづける。

「雅美は、私よりこの家の事は知っておりますから、何でもお申しつけ下さい。身の回りのお世話もこの子が致しますので」

彰子の言葉が終わった時、雅美の手から盆が滑り落ち、床で騒々しい音を立てた。

その瞬間、私は彰子が雅美に反射的に向けた視線を見る。その視線は、穏やかな彰子には相応しからぬ鋭く、厳しいものであった。だが、一瞬後にはそんな視線も現われた時以上に唐突に消え、彼女の雅美に向けた言葉も優しいものであった。

「まあこの子ったら……若い男の方が久方振りにお見えになったから緊張しているの？ フフツ……」

「失礼いたしました」

雅美は慌てて床の盆を拾上げ、小声でわびを言い、応接間から退散する。

私は紅茶とともに出されたミルクをティカップに注ぎ、砂糖を一杯加える。一口、その熱く豊潤な液体を飲み、目を上げると、まるで私の目を覗きこむようにしていた彰子の視線とまともに目が合う。

彰子の微笑みが更に深くなる。

「お部屋は離れの方に雅美に用意させておきましたわ。今日はゆっくりとおくつろぎ下さい、大学の方には来週早々にもご案内いたしますから……」

その彰子の言葉に私は軽い驚きを感じる。

手紙の内容から察するに、明日にでも勤務かと思っていたのだ。それに今日はまだ水曜日なのだ。

「来週ですか、結構時間がありますね」

「色々御準備もおありかと思ひまして、そう取り計らったのですが……」

「いえ、ありがたい事です。お気遣い感謝いたします」

私は内心の疑問を押し殺し、彰子に頭を下げる。

以下、次回へ